

「満洲」関係資料の企画展示会と講演会の開催について
－宇都宮大学附属図書館の地域貢献に関する事例報告－

板橋 久夫

大学図書館研究78号別冊
2006年12月発行
(pp.93～104)

「満洲」関係資料の企画展示会と講演会の開催について

－宇都宮大学附属図書館の地域貢献に関する事例報告－

板橋 久夫

抄録：宇都宮大学附属図書館では、宇都宮高等農林学校時代などに収集された「満洲」関係の資料を再構築し、新たに開設した「旧植民地関係資料室」に配架して公開した。同時にその所蔵目録も図書館のホームページで公開した。またそれを記念して、関連の企画展示会と講演会を開催した。大学図書館の地域貢献の一例として、その業務内容を報告する。

キーワード：宇都宮大学附属図書館、展示、講演会、図書館公開、地域貢献、満洲、旧植民地

1. はじめに

国立大学の独立行政法人化に伴い、宇都宮大学でも中期目標・中期計画が策定された。その中に「地域貢献の本学の理念『地域に学び、地域に返す、地域と大学の支え合い』を基本に地域連携を積極的に推進する」という目標があり、その平成17年度計画のひとつに「附属図書館に所蔵する特色ある貴重資料を整理し、展示会や講演会などの公開サービスを提供する」¹⁾という業務が掲げられた。

地域貢献に関しては、宇都宮大学附属図書館では比較的早い平成12年から一般市民への貸出を実施している。その後放送大学の栃木学習センターが同じ建物に併設されたこともあって、17年12月1日現在700名を超える学外者が登録しており、年間9,880名が入館し、2,300冊を貸出している。(平成16年度統計)しかし、閲覧・貸出・レファレンス以外にも、もっと積極的な新しい試みもされなければならないことになった。本稿では、大学図書館の地域貢献の一例として当館が如何にしてこの計画を具体化していったかを報告したい。

2. 基本方針の策定

基本方針は利用者サービス係長(筆者)が原案を作成し、毎月1回開かれるスタッフミーティングや係長会議で検討し、最終的には平成17年1月に以下のような計画を策定した。

(計画の概要)

- ① 対象とする「特色ある貴重資料」は、本学の前身である宇都宮高等農林学校や栃木師範学校時代に収集された「満洲」(現中国東北部)関係の資料とする。
- ② 新たに「満洲関係資料室(当初の仮称)」を設置し、館内に散在する関係資料を1ヶ所に集めて地域にも公開する。
- ③ 対象資料は、平成元年に作成された冊子体の

「満洲関係資料目録」²⁾(以下「平成元年版目録」と表記)に掲載された資料を中心とし、以後受入れた関係資料も追加する。

- ④ 所蔵目録を作成し、図書館のホームページで公開する。
- ⑤ 資料室は、書庫入口の司書室を改装し、必要な書架等を平成17年度予算で要求して設置する。
- ⑥ 資料室開設記念の展示会と講演会を大学祭期間中に開催する。
(作業スケジュール)
 - ・平成16年11～12月：平成元年版目録のEXCELによる入力作業(計画策定時にはすでに終了)
 - ・平成17年1～3月：入力データの校正作業及び新たなデータの追加作業
 - ・平成17年4～5月：資料室の備品等整備
 - ・平成17年6～8月：資料点検及び配架作業
 - ・平成17年9月：資料整備と講演会の準備、PRの開始
 - ・平成17年10月：資料室オープン
 - ・平成17年11月：企画展示会と記念講演会の開催

3. 所蔵目録の作成と資料のピックアップ作業

① 「平成元年版目録」のこと

「平成元年版目録」は、当時のレファレンス担当の職員がほとんどひとりで作成したものであるが、この目録の存在なしには今回の事業はありえなかったと言える。収載件数は、795件で、数千点を収載する北大図書館の目録³⁾に比べれば見劣りするものだが、ひとりの司書がルーティーン・ワークの合間を縫って、カード目録や書庫の中を丹念に調査した成果であり、文献目録作成の仕事として高く評価できるものであった。

ただし、作成以来15年が経過し、冊子体であるという限界もあり、その目録の存在も当館の職員にさえ忘れ去られたものになっていた。しかし昨年

「この仕事を無駄にしないようにホームページで公開しよう」という声があがり、手始めに夜館開館要員の学生を使ってEXCELによる入力作業を行なった。この準備作業が終了していたのも、企画を立ち上げるきっかけのひとつになった。

目録の構成は、歴史・経済・農林業などの分野ごとになっており、資料ごとに書誌・所蔵データを記載したものである。資料を大別すると、高等農林学校図書（旧分類図書）、パンフレット類、雑誌扱い資料、一般図書の4種類あり、現物は館内のそれぞれの配架場所に散在していた。

② 資料のピックアップ作業と新所蔵目録の作成

まず「平成元年版目録」のうち、調査時点で所在不明のものや不要の資料を取り除き、それ以降に受入れた関係資料をプラスしたリストを作成することにした。平成元年という年は、全国的に目録の電算化が一般的になった頃である。当館においても、それ以降に受入れたものは比較的容易にキーワード等の検索で旧目録のリストに追加することができた。夏季休業期間中は、そのリストに従い資料の現物を集める作業を行なった。その作業の最中に、検索からもれたものを直接書架で発見できたものも多かった。こういう作業をやってみると、上手くやったつもりでもOPAC検索だけでは完全ではないということがよくわかる。書架を実際にあたってみるという最近忘れがちな基本作業がいかに大切なものが実感できた。最終的には、927タイトルを新しい書架が整備された資料（準備）室に集めることができた。データもそれなりに編集し、新所蔵目録の作成とホームページ公開の基礎作業が完了した。

4. 講演会・展示会の準備

この事業の基本コンセプトは、「満洲」あるいは「満洲国」というものがどういう存在であったかを、資料展示や講演を通じて学内外の多くの人に知ってもらうということである。平成17年は「戦後60年」ということもあり、展示会のキャッチフレーズは、最終的に「戦後60年、資料で見る「満洲」」ということになった。（この時点では他にもいろいろな意見があったが、6.で後述する「満洲」の表記の問題を経た上での最終的なキャッチフレーズである。）

講演会の講師については、当初この資料に詳しい本学の名誉教授を予定していたが、都合が悪くなり、急遽国際学部国際社会学科の伊藤一彦教授にお願いし、快諾を得ることができた。講演会のテーマは「満洲」と関連資料」ということになった。

5. 運営委員会での承認

この計画は、平成17年10月3日の図書館運営委員会に報告された。事業の内容については基本的には承認されたが、ある東洋史専攻の委員から「満洲という言葉を使用することについては配慮が必要ではないか」という意見が出され、さらに「その言葉を使用する場合は、どういう意味で使用しているのかを、外部に対して説明できる準備をしておいた方がよい」という忠告を頂いた。

このことは、ほんやりとは認識してはいたのだが、はっきりとこのような忠告を受けてみると、そのまま準備をスタートしてしまったことは全く軽率だったとしか言いようがなく、われわれの無知を思い知らされることになった。結局、資料室の名称の再検討まで含めて、きちんと勉強をして仕切り直しということになった。

6. 「まんしゅう」という言葉の問題

広辞苑第5版¹⁾をそのまま引用すると、

「まんしゅう【満州・満洲】

中国の東北一帯の俗称。もと民族名。行政上は東北三省（遼寧・吉林・黒竜江）と内モンゴル自治区の一部にわたり、中国では東北と呼ぶ。」

「まんしゅう-こく【満州国】

日本が満州事変により、中国の東北三省および東部内蒙古（熱河省）をもって作りあげた傀儡（かいらい）国家。1932年、もと清の宣統帝であった溥儀（ふぎ）を執政として建国、34年に溥儀が皇帝に即位。首都は新京（長春）。45年日本の敗戦に伴い消滅。中国では偽満州国と称。」

というように記されている。現在の中国では「まんしゅう」のことを「東北」と呼び、「まんしゅうこく」のことは「偽満州国」と称するという最も基本的なことでさえも、全く恥ずかしいことにはっきりとは知らなかった。これから関連の展示会を実施しようとする者が、「まんしゅう」の「しゅう」の字は「州」と「洲」どっちの漢字でもいいのかな…くらいの認識しかなかったのである。

それから「にわか」勉強が始まる。「百科事典で確認し、調査対象事項の定説と基本情報を押さえることこそ勉強の出発点となる」²⁾ にならって、百科事典から始まり、概論書を調べ、講演を依頼した伊藤教授にもご教示を仰いだりした。ともかくわれわれの基本スタンスを調えることにした。

ちなみに、世界大百科事典³⁾には、次のように記述されている。そのまま引用させていただく。

「まんしゅう 満州(洲) Man Zhou

本来は清代に中国を支配していた満州族が旧来の

女真という族称を廃して、満洲と改称したことに由来する。転じて、満州族の祖宗の地である中国東北部のことを日本では満州と呼び、中国以外の国々はマンチュリア (Manchuria) と呼んできた。ことに日本はこの地域に作った傀儡政権に満州国の名をつけた。中国ではこの地域のことを東北と呼び、満州とは呼ばない。侵略者による呼称であることが大きな理由である。(河野通博)』

このような言葉の問題を長々と図書館の業務報告に記載する必要があるのかと訝るむきもあろうが、所蔵する資料がどういう歴史的な意味をもった情報源であるのか等に関して、曖昧な知識のままでは、地域貢献も情報発信もままならない。特に今回の事例では、この言葉の問題が重要な意味を持つていることに、遅ればせながら気付かされたのである。

広辞苑に記されていた「偽満州国」という言葉を例にとれば、1932年(昭和7年)に歴史上に忽然と現れ、1945年(昭和20年)に跡形もなく消え去った「満州国」という国は「ある立場においては」(特に中国から見れば)「存在しなかった、ことになっている」という意味なのである。中国からの留学生も数多く(平成17年5月現在181名)在籍する本学において、「無知でした」では済まされない問題をかかえていたわけである。

また、検索のテクニックの問題にも関係があるので、もう少し詳述することをご了承いただきたい。例えば、満「州」でも満「洲」でも同じように検索することのできるシステムならさほど問題はないが、「満州」と「満洲」があることを忘れては、たくさん検索もれが出てしまう恐れがある。このようなことは多分よくあることで、この事例に限らず検索に際しての注意すべき事のひとつである。

ちなみに、NII提供の「CiNii」を使い、「論文名」で検索してヒットした件数は下記のとおりだった。

満州：1,379件

満洲：1,009件

満州OR満洲：2,383件

「満州」しか知らなければ半分近くは見落としてしまうことになる。一般的な漢字変換では、「満州」の方が候補として先に出てくるか、それしか候補にない場合もあり、「満洲」の方を使用している論文は、即断はできないが、それだけこの言葉を意識的に使用していると思われる。

参考文献の調査や伊藤教授のていねいなご教示の結果、少しずつ関連する内容を理解するようになっていった。そして、これらの基礎調査を通じて、

- ① 満洲はもともと民族名であったこと
- ② やがて日本や欧米が満洲を地名として使うよう

になったこと

- ③ 日本が満洲事変をおこし、その地に傀儡国家、実質的な植民地である「満洲国」をつくったために、中国人が地名としての満洲という言葉嫌うようになり、戦後の日本では、中国東北地方(満洲)とか、「満洲」「満洲国」あるいは〈満州〉などと括弧をつけて表記したりするようになったこと

- ④ 現在は「州」も「洲」も同じように使用されているが、厳密に言えば「州」は、広州とか杭州のような地名には使うが、満洲は地名ではないので「洲」が本来の文字であること

などの歴史的背景を踏まえた基礎知識を共通認識とし、その上で以下のようなことを決定した。

- ① 新たに開設する資料室の名称を「旧植民地関係資料室」とする^{*)}。
- ② そこに所蔵する資料を、「旧植民地関係資料室所蔵「満洲」関係資料」と表記する。(角括弧・さんずい付き)
- ③ 講演会や展示資料の名称やその解説、冊子体目録、展示リスト等の表記については、資料の表記にかかわらず便宜上「満洲」(さんずい付き)を使用し、その旨注記をする。
- ④ 展示会には、「満洲」という言葉の説明として、「広辞苑第5版」と「世界大百科事典」の記載事項を引用して掲示する。
- ⑤ 展示会のキャッチフレーズを、「戦後60年、資料で見る「満洲」」とする。開催期間は、平成17年11月20日から12月22日とする。講演会は、11月23日とする。
- ⑥ 展示会には、関連年表を作成して掲示する。
資料室の看板やイベントのポスター、各方面へのPRやホームページの原稿など準備することが山ほどあったが、これらの基本事項が決定されてからは、比較的スムーズに作業が進行するようになった。

7. 展示する資料の選択と展示の実際

展示する資料については、まず視覚に訴えるものであること、最初から最後まで通して見れば「満洲」あるいは「満洲国」の全体像が理解できるようなものであること、本学や栃木県に関係ある資料があれば選択すること等を心がけた。

以下、資料の種類別に、展示資料の選択の状況と展示の実際について記した。なお、展示資料の一覧は表1の通りである。

- ① 机上展示資料について
博物館や文書館等の展示会といえば、ガラスケー

表1 展示資料一覧

宇都宮大学附属図書館「旧植民地関係資料室」開設記念企画展								戦後60年、資料で見る「満洲」		～展示資料一覧	
								2005年11月1日			
No.	請求記号	書名	著者名・編者名・翻訳者名	出版社(発行所)	出版年(年号)	ページ数・冊	備考				
展示ケース											
1-32	未製本雑誌	滿洲グラフ : 創刊號(1933)-		南滿洲鉄道株式会社	1933(昭8)~	32冊	展示した号:1,4,5-6,8,14,18,20-21,23,25-26,29-31,33,36,39-40,43,45-47,50,52,55,60-61,63-65,71号				
参考1	222.5-N87	國説大連都市物語	西沢泰彦	河出書房新社	1999(平11)	111p	展示:現在の酒鉄関係の建物写真(コピー)⇒机上展示「参考5」				
参考2	個人蔵	真紅な動輪	小平裕(監督・脚本)	東映	1982(昭57)	1枚	中国のSLを追ったドキュメンタリー映画の宣伝用チラシ				
参考3	未製本雑誌	ビッグコミック・オリジナル : 939号(2005)		小学館	2005(平17)	1冊	展示:村上もとか「龍RON」:「滿洲グラフ」からの引用ページ				
参考4	R7-Sh95-4	戦争の記録(日本写真全集 4)		小学館	1987(昭62)	179p	展示:酒鉄開拓青少年義勇軍				
机上図書展示											
1	222.5-Ta22	國説酒洲帝国(ふくろうの本)	太平洋戦争研究会	河出書房新社	1996(平8)	159p	「酒洲」についての概論・写真多数				
2	師範292.25-107	南滿洲写真大観		南滿洲鉄道株式会社	1910(明43)	1冊	各地の写真				
3	師範292.25-115	酒鉄観光団	酒鉄観光団		1911(明44)	425p	栃木県乗客の観光団の記録				
4	師範292.25-109	酒鉄紹介		南滿洲鉄道株式会社	1921(大10)	168p	当時の「酒鉄」の地理・歴史・産業・貿易・地方経営・交通運輸				
5	農専771-1	大連	篠崎嘉郎	文化図書刊行会	1922(大11)	1360p	中心都市「大連」の沿革現勢〜(大連市街全景写真を展示)				
参考5	222.5-N87	國説大連都市物語	西沢泰彦	河出書房新社	1999(平11)	111p	都市「大連」の写真概説⇒「展示図書5」との比較				
参考5	個人蔵	井上ひさしの大連:写真と地図で見る酒洲(Shotor Museum)	井上ひさし・こまつ座編	小学館	2002(平14)	127p	同上				
6	農専771-17	酒洲踏査記念写真帖:昭和8年夏	酒洲産業建設学徒研究会	至誠会本部	1934(昭9)	1冊	昭和8年夏の酒洲産業建設学徒研究会の旅行記録				
7	師範390.28-101	酒洲上海軍要要録	愛国会	愛国会書録編纂部	1932(昭7)	1147p	「酒洲、上海軍要」の戦死者の列伝				
8	師範393.2-111	酒洲建國と酒洲・上海大事記		下野新聞社	1932(昭7)	214.4p	「酒洲軍要」「上海軍要」「酒洲建國」の記録写真				
9	農専675-27	リットン報告書(日支紛争に関する国際連盟調査委員会の報告)	外務省訳	国際連盟協会	1932(昭7)	652p	国際連盟のいわゆる「リットン調査団」の報告書				
10	農専668-31	酒日對峙酒洲國六法全書		帝國地方行政学会	1933(昭8)	1460p	「酒洲国」の六法全書				
11	P771-41	酒洲國現勢:建國〜大同2年版		滿洲国通信社	1933(大同2)	285p	「酒洲国」の全体像を記録した年鑑				
参考11	未製本雑誌	ビッグコミック・オリジナル : 940号(2005)		小学館	2005(平17)	1冊	展示:村上もとか「龍RON」:「酒洲國現勢」からの引用ページ				
12	P771-33	酒洲國概観		國務院総務庁情報部	1934(康徳1)	1冊	國務院発行の「酒洲国」の概要パンフレット				
13	P771-34	新酒洲		國務院総務庁情報部	1935(康徳2)	1冊	國務院発行の「酒洲国」の写真パンフレット				
14	未製本雑誌	酒鉄軍報:4巻5号(1935)		酒鉄軍報社	1935(昭和10)	221p	特集:「酒洲」の衣・食・住				
15	農専643-24	最新酒鉄移住案内:新天地の開拓		南光社	1932(昭7)	207p	「酒鉄」への移住のための手引書				
16	P643-5	酒鉄開拓青少年義勇軍		朝日新聞社	1939(昭14)	248p	義勇軍への参加を促すための概論・手引書				
17	農専771-23-H7	酒洲補充地理歴史教科書:高等小学校用	在滿日本教育会教科書編纂部	在滿日本教育会	1938(昭13)	64,43.9p	高等小学校用「補充地理」「補充歴史」〜展示:年表				
18	農専753.4-16	酒洲帝國分省地圖並地名總覽		國際地学協会	1942(昭17)	圖44	建國十周年記念として発行された「酒洲国」の地図帖				
19	P548-4-5	時憲書:康徳四年	酒洲国中央觀象台	國務院	1937(康徳4)	56p	「酒洲国」が発布した公用の暦				
20	P547.3-26	酒洲平均気温及降水量圖	酒洲国中央觀象台	酒洲国産業部大臣官房	1939(康徳6)	35p	「酒洲国」の月ごとの平均気温・降水量圖				
21	師範612.22-103	酒洲農業誌	酒鉄総裁室弘報課	非凡閣	1941(昭16)	186p	「酒洲」在来農業の農耕法・農作物・農機具等の写真				
22	師範292.25-108-4	酒洲地誌:付録	守田利定	丸善	1906(明39)	1冊	展示:農牧林産色別位置圖				
23	農専476-24a	酒鉄樹木園説	佐藤潤平	誠文堂新光社	1943(昭18)	392p	約520種類の「酒洲国」内の樹木園説				
24	農専992-6	酒洲の民藝	本山桂川	昭和書房	1943(昭18)	280p	「酒洲」の民芸・民具・玩具・装飾ほか				
25	R7-Sh95-2	芸術写真の系譜(日本写真全集 2)		小学館	1986(昭61)	179p	写真家・瀧上白陽関連				
26	個人蔵	瀧上白陽と酒洲写真作家協会(日本の写真家:6)		岩波書店	1998(平10)	71p	瀧上白陽と「酒洲」の写真家たちの作品集				
参考	*その他、最近の	酒洲「関係」の出版物や、関連資料を何点が展示しました。									
掛地図等展示											
1	*	酒洲・朝鮮・北支鐵道圖:縮尺100万分の1	南滿洲鉄道株式会社編	亓人会館出版部	1938(昭13)	1枚	地圖:色刷り:240×220				
2	*	東亜大陸諸國疆域圖:縮尺400万分の1	東方文化学院京都研究所	富山房	1937(昭12)	1枚	地圖:色刷り:130×146				
3	*	酒鉄戦蹟地圖:其一:酒鉄一般圖:縮尺250万分の1		陸地測量部	1927(昭2)	1枚	地圖:色刷り:135×73				
4	M-14	酒鉄雨量分布圖		酒鉄農務課	1927(昭2)	1枚	地圖:色刷り:105×70				
5	M-12	酒洲帝國林野分布圖:縮尺200万分の1		酒洲国農務部林務司	1936(康徳3)	1枚	地圖:色刷り:95×79				
6	P273-1	作物分布ヨリ見タル酒洲農業地域圖:縮尺200万分の1		酒鉄北滿經濟調査所	1938(昭13)	1枚	地圖:色刷り:109×78				
7	P273-2	酒洲開拓農民入植圖		酒洲拓務公社	1939(康徳6)	1枚	地圖:色刷り:109×78				
8	M-11	酒洲帝國統治組織表:康徳元年5月25日		國務院統計処編	國務院総務庁情報部	1934(康徳1)	1枚	表:79×99			
9	*	酒洲及東部内蒙古産業地圖(世界産業地圖:第一圖)		大阪藥園堂	不明	1枚	掛け圖:色刷り:109×80				
10	*	日本/海外航路日本人/海外分布圖(世界産業地圖:第十五圖)		大阪藥園堂	不明	1枚	掛け圖:色刷り:109×80				

展示図書③	満韓観光団誌
師範292.25 115	下野新聞社主催・栃木県実業家 満韓観光団 明治44 (1911)
栃木県人の満韓観光団34名の1ヶ月にわたる 視察旅行の記録	

図1 展示資料を説明したカードの例



写真1 机上展示とパネル展示

スに資料を並べて解説を付けるという方法が一般的だろうが、図書館ならではの展示ということを考えれば、「手にとって閲覧できる」ということだろう。明治から戦時期にかけての貴重資料が中心なので、壊れやすいものもあるが、「取り扱いにご注意下さい」という注意書きをつけて机上に展示することにした。机上には、その資料を置いた場所に書誌・所蔵事項と簡単な内容を記載したカードを貼り付け、同じものを「しおり」状にして資料に挟んだ(図1)。さらに事務用の貸出処理をし、持出し防止のタクトレープを貼付した。(結果的には、見学者のマナーは概ね良好で、ひどい破損や紛失は皆無だった。)

展示用のデスクは長さ180cmの折りたたみ式のものを使用し、通路状の展示スペースに7基つなげて配置した(写真1)。そのスペースに見合う数ということで、展示図書は25点程度となった。

まずは、「満洲」についての比較的新しくわかりやすい入門書ということで、太平洋戦争研究会編「凶説満洲帝国」(河出書房新社、1996)を選んでトップに置いた。(入門書ということで2冊展示)次からはほぼ年代の古い順に、なるべく多岐にわたる分野の写真や図の多い資料を並べていった。

日本の「満洲」への本格的な進出は、1905年(明治38年)のポーツマス条約(日露戦争)で鉄道等の利権を獲得したこと、さらに1906年(明治39年)に国策会社の満鉄(南満洲鉄道株式会社)が設立されたことに始まる。当館に残されている資料もそれ以降のものである。以下展示に関していくつか特記すべきものを紹介する。

栃木県関係としては、地元紙である下野新聞社が企画した実業家たちの韓国・満洲への観光記録がある。珍しい明治期の大掛かりな観光記録ということで、栃木テレビのニュース(8-④で後述)でも紹介された。もう1点は、やはり下野新聞社発行の「満洲建国と満洲・上海大事変史」(1932)というニ

ース写真集を展示した。満洲事変のきっかけになった事件、伊藤教授の記念講演で「鉄道爆破それ自体が存在しない完全なでっちあげではないか」という説もある」と採りあげられた柳条湖⁹⁾鉄道爆破事件の写真もその中にある。講演が終わった後にその写真を興味深そうに閲覧する人が多かったようだ。ついでに記すが、満洲事変関係としては、国際連盟脱退のきっかけとなった「リットン報告書」(1932:いわゆるリットン調査団の報告書:外務省による対訳版)も展示した。誰もが日本史で習ったことのある有名な資料ということで、これもテレビニュースで紹介された。

本学関係としては、宇都宮高等農林学校の学生も参加した満洲産業建設学徒研究団による「満洲踏査記念写真帖」(1934)がある。実はこのことは、毎日新聞の取材(8-④で後述)の際に、「農林学校の学生を満洲へ派遣したという事実はあるのですか」という質問がきっかけで判明したことである。全く虚を衝かれた質問で、あとであわてて「農学部六十年史」¹⁰⁾を調べた結果その事実を発見したというわけである。遅ればせながら「六十年史」も一緒に参考展示することにした。

「満洲国」関係としては、年鑑にあたる「満洲国現勢」(1933)、「満洲国六法全書」(1933)、国の公式の暦である「時憲書」(1937)、国のPRパンフレット等を展示し、パネル展示(③で後述)した「満洲帝国統治組織表」(1934、79×99cm)とあわせて満洲帝国の全貌が分かるように工夫した。

その他、満洲への移住案内書や青少年義勇軍への勧誘書・満洲補充教科書・当時の地図帖・樹木図鑑・平均気温図・農産物の生産位置図・民芸の本など、なるべく内容が多岐にわたるように展示した。

この分野の研究者にとっては、これらの資料はさほど珍しいものではないかもしれないが、「特別に何か研究しているわけでもない者にとっては、こう

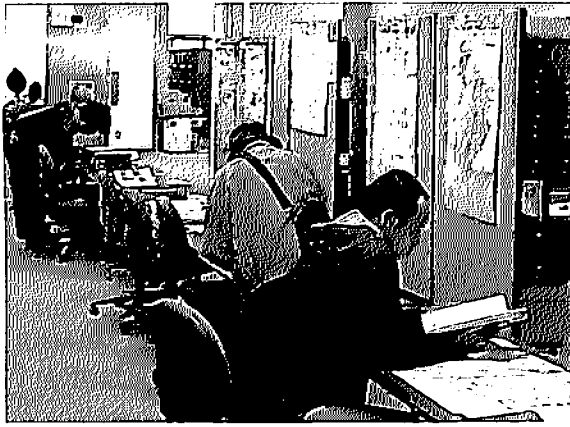


写真2 机上展示図書を読覧する人

いう資料に触れる機会がないのでとても貴重な体験ができた。特に順路に沿って歩くだけの展示ではなく座ってゆっくりと資料にあたる点がよかった」とアンケート（10.で後述）に書いてくれた市民がいた。今回の方式を準備したものにとってはうれしい評価だった（写真2）。

展示図書の中に、「大連」（文化図書刊行会、1922）という1,360ページにわたる分厚い図書がある。その中に折り込みで、当時の中心都市大連の大パノラマ写真（ヨコ長約2m）を発見した。多少破損していた箇所を修復し、台紙の上にビニールでカバーして固定して展示した。現在の大連との比較のために「図説大連都市物語」（河出書房新社、1999）や「井上ひさしの大連」（小学館、2002）を近くに参考展示した。（旅行会社の「懐かしき満洲の旅」のような企画も存在するようで、学内外に限らず満洲への玄関口である大連に行ったことのある人が多くて人気のあるコーナーだった。）

また、大連といえば、再び長い話になるが、「アカシヤの大連」のことを記しておきたい。

展示の目玉のひとつである写真誌「満洲グラフ」（②で後述）の展示号を選ぶ作業中に、清岡秋子という女性が書いた「大連にて」という詩が目に入った。（通巻73号：1940.8）「大連」「清岡」とくれば図書館員ならずとも清岡卓行の芥川賞受賞（第62回：昭和44下半年）作品「アカシヤの大連」¹¹⁾を思い出すだろう。発見した詩はすばらしくみずみずしいもの（筆者感想）で、「美しい港町、アカシヤ香る大連（中略）果てない郷愁を籠めて、青春の大連を清冽に描く」¹²⁾卓行の作品とも見事に呼応していた。当然秋子という女性と卓行の関係を調べることになるが、どうしても判らない。そこで思い切って、紳士録で調べた情報で作家に直接尋ねてみることにした。取次ぎの方に事情を話すと、運良くお元気な作家本人¹³⁾と話をすることができ、秋子という女性

は、卓行の4人いる姉のうちのすぐ上の姉であることが判明した。

このことをきっかけに、一連の机上展示とは別に「文学と満洲」というミニ・コーナーを設け、ガイドブックとして、川村湊「異郷の昭和文学：「満洲」と近代日本」（岩波新書、1990）を置いた。もちろん清岡秋子の詩が掲載された「満洲グラフ」と「アカシヤの大連」を並べて展示し、上記の経緯を解説として付した。その他最近の満洲を扱った作品として、船戸与一「満洲国演義・霊南坂の人びと」が連載されている「週刊朝日」の最近号、岩井志麻子「偽満洲」（集英社、2004）や伊集院静「ツキコの月」（角川書店、2005）などを参考展示した。

ついでに、展示リストには掲載しなかったが、今回の調査のために入手した図書や雑誌、新聞記事のコピーなどを、節操のない寄せ集めのようなだったが、個人所蔵のものも含めてあえて参考展示をした。

「週刊鉄道データファイル」（デアゴスティーニ・ジャパン、2005）の「超特急あじあ号」を牽引した「バシナ型蒸気機関車」の掲載号、「別冊歴史読本19」（新人物往来社、2005）の「外地鉄道古写真帖」、前述の武田徹「偽満洲国論」、坂本龍彦「集団自決：棄てられた満洲開拓民」（岩波書店、2000）、中国引揚げ漫画家の会編「ボクの満洲：漫画家たちの敗戦体験」（亜紀書房、1995）、村上もとか「龍（RON）」（②で後述）が連載されているビッグコミック・オリジナル（小学館）など、主に一般市民を意識した参考展示資料である。

② 写真雑誌「満洲グラフ」の展示について

書庫の片隅に埃をかぶって眠っていた「満洲グラフ」¹⁴⁾と出会ったときは胸がときめいた。乱暴に穴が開けられ、紐で閉じられた状態で置いてあったこれらの雑誌を開くと、眩目するような素晴らしい写真が次々と現れた。手が埃で真っ黒になるのもかまわずページをめくりながら「これでなんとか皆さんに見てもらえる展示会ができる」と安堵したものだ。こんな雑誌を当館で所蔵していたことさえ知らなかったのも、まずは「満洲グラフ」がどんな雑誌であったのかの調査を開始した。

昭和の始めに、日本の文化や国力などを主に海外向けにPRする目的で、グラフ雑誌がいくつか創刊された。名取洋之助を主幹とする日本工房が創刊した「NIPPON」や木村伊兵衛を中心とする東方社の「FRONT」がその代表例である。戦時下にもかかわらずいずれも豪華なグラフ誌だったようだ。「満洲グラフ」はそれらの先駆的存在で、1933年（昭和8年）に南満洲鉄道株式会社（満鉄）から隔月刊の

PR誌(1935年4月から月刊)として創刊された。創刊された時点では、同様のグラフ誌は1923年創刊の「アサヒグラフ」があるだけで、アメリカの「LIFE」(1936年創刊)さえも創刊されていなかった。PR誌とは言え、左から右への文字組、芸術的な写真、さらに数ヶ国語での表記など、当時としてはかなり斬新な編集が施されていた。その創刊にも関わり編集の中心になって活動していたのは淵上白陽という人物だった。

写真家淵上白陽(ふちかみはくよう1889-1960)は、満鉄の招きにより1928年(昭和3年)に渡満、1932年(昭和7年)に「満洲写真作家協会」を設立、満洲写真界のリーダーとして、また満鉄の宣伝・広報活動の中心人物として、1941年までの13年間満洲を舞台に活動を展開した¹⁵⁾。淵上を中心とする満鉄総裁室弘報課のスタッフは「満洲国」のプロパガンダという任務のもとに、絵葉書や旅行案内、教科書の副読本、児童書の刊行まで手がけたらしい。その中でも特にこの「満洲グラフ」は、「内地では到達し得なかった自由で、上質なモダニズムの実験的表現が伺える」¹⁶⁾独自のグラフ誌と言えるものであった。淵上のもとに集結した若き才能ある写真家たちの写真を使い、フォトモンタージュの技法なども駆使して、国家宣伝という役割を持ちながらも、彼らの表現は「社会と美術の関係についてのひとつの成果を提示している」¹⁷⁾と評価されるものだった。この雑誌に初めて接した時の瞠目するようなインパクトの強さにはこのような背景があったのかと改めて感心した。

インパクトが強い分、どんな写真を選んで展示するかは大きな課題となった。創刊から年代順に見ていくと、当初は「満洲国」がいかにすばらしい国であるかというPR色の強い国情紹介的なものだったが、1937年(昭和12年)の盧溝橋事件をきっかけに、翌年4月まで「事変特輯」号を何度も組んだりして、国防宣伝色を色濃く出すようになり、やがて戦時下日本の国家宣伝戦の武器としての役割を担っていったようだ。もちろん写真に添えられた当時の記事は、日本側からの一方的とも言える内容のものではあるが、このような背景で発行されていたことを解説した上で、当館で所蔵する号の中から、当時の「満洲」の様子をなるべく多岐にわたって紹介できるような選択をして展示することにした。「事変特輯」号も避けて通れないと判断していくつか展示した。アンケートの結果でみる限り、大部分の人にはその趣旨を理解していただけたようだが、ある学生(22歳)から、「満洲グラフ」の展示を見て、「明らかな事実はまた認めない。また美化する。なぜ今、



写真3 展示ケース

中国東北の人は嫌いな気持ちある。これは植民されたの苦痛、また治さないの苦痛、何を頼る、ここに中国東北の展示がある。そう一方的であるの展示、目的はなに? 意味はなに?」(原文のまま)と書かれたものが一通あった。日本語による解説を読まずに、写真と添えられた記事だけを見ての感想なのか、全てを承知した上での抗議なのかは不明だが、「満洲」というテーマの重さを改めて思い知らされた気がした。

「満洲グラフ」は、一般的な展示に使用される展示ケース5基を使って行なった(写真3)。基本的にはページを開いた形で計32点を展示した。手にとって自由に閲覧してもらえるような保存状態ではなかったこともあるが、綴じてあった紐を外してみると1冊1冊はかなり薄いもの(20~30ページ)で、選択したページを広げて展示した方が効果的であると判断した。しかし、極力コピーすることは避けたので、興味深い写真があっても同じ号から複数のページを展示できなかったのは残念だった。(例外として、創刊号(1933)の表紙と創刊の巻頭言は並べて展示したかったので、巻頭言をコピーして展示した。)

また、展示したページの写真や記事については、当時発行されたままの姿をそのまま提示することにして、あえて個別のコメントや解説を付けることはしなかった。それができるほどの学問的知識を持ち合わせていなかったこともあるが、それよりも、当時どんな表現をしていたのかを生のまま見ていただいて、それぞれの立場の方に、それぞれの受け止め方をしていただければよいという判断であった。

ただ、その展示ケースの中には、参考展示としていくつか現代の資料も併せて展示した。例えば、ポスター(8-①で後述)にも使用した「満鉄超特急あじあ号」の写真に掲載した8号(1934)の横に、中国のSLのドキュメンタリー映画「真紅な動輪」(東映、1982)の宣伝用チラシ(個人所有)を置いたり、

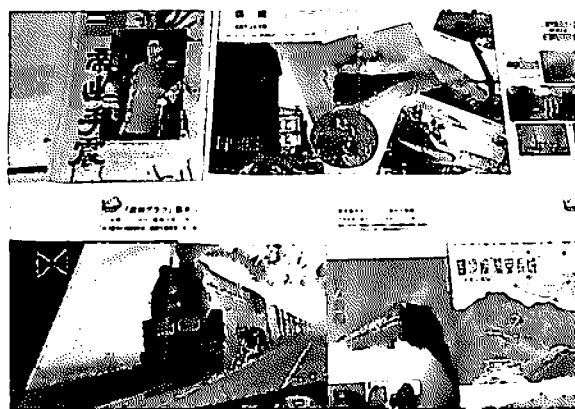


写真4 「満洲グラフ」の展示



写真5 「満洲グラフ」とコミックスの展示

「青少年義勇移民」を採りあげた47号（1938）の横に、「日本写真全集4：戦争の記録」（小学館、1987）の「満蒙開拓青少年義勇軍」のページを展示したりした（写真4）。

また、「満洲グラフ」の調査中に、最近どこかで見たような写真といくつか出会ったのだが、どこで見たのだろうとしばらく考えた末に思い当たったのが、筆者の愛読書であるコミック誌「ビッグコミック・オリジナル」（小学館）に当時連載されていた「龍（RON）」（村上もとか）であった。この作品は日本近代史を背景にした壮大なストーリーで、同誌に15年もの長きにわたって連載されていたものである（平成18年6月完結）。調査中だった平成16年12月当時の舞台は、まさに1945年（昭和20年）8月、崩壊直前の「満洲国」であった。この偶然の出会いにわくわくしながら調べていくと、「満洲グラフ」に掲載されていた写真から、農民の姿や風景などを模写して使用している部分を何ヶ所も発見した。その他にも机上展示した「満洲国現勢」（1933）に掲載されていた「王道楽土大満洲国」という巨大な碑の写真も模写して使用していた。コミックスとはいえ、当時の資料等の綿密な取材のもとに描かれていたのには感心した。そこで思いついたのが、「満洲グラフ」と「ビッグコミック・オリジナル」を並べて展示¹⁶⁾してみようということだった。早速同誌の該当号を数冊購入して、引用されている写真の掲載号の横に参考展示した（写真5）。

この展示は若い人を中心に人気のあるコーナーだったが、「それを展示する意味が伝わりにくかった」というアンケートの評価もあった。

③ 掛け図・掛け地図の発見とパネル展示

古い歴史を持つ大学図書館の書庫の中には何が眠っているか見当もつかない。国宝級のものが発見されたというニュースを耳にしたこともある。図書と

か雑誌なら整理することには慣れているが、それ以外のむしろ博物館にある方が相応しいものの扱い方には困ってしまう。当館の書庫の片隅にも、高等農林学校時代の掛地図や掛け図の類が丸めて紐で縛ったまま山のように積んである。この中からきっと何か見つかるかもしれない。何しろ「初代佐藤校長の信念にもとづき、農林専門学校における移民ないし拓殖に関する教育を重要視し、開校当初から海外発展に関する研究に意が注がれ¹⁹⁾」ていたのである。

ある日、意を決して頭にタオルを巻きマスクをして、その宝の山にチャレンジした。ほぼ半日の作業で、15点近くの関係資料を発見することができた。これらは「まず視覚に訴えるものであること」という意味ではうってつけの資料であり、その中から10点を選んで展示することにした。

「大阪集画堂」発行の「世界産業地図」というシリーズの「日本ノ海外航路ト日本人ノ海外分布図」と「満洲及東部内蒙古産業地図」は、紙が劣化していて広げようとするバリバリと音を立てて破れそうだったが、あまりにきれいな彩色だったので全部裏打ち修理をしてパネル展示をした。製作年も不明だったが、在外邦人の統計²⁰⁾から1927年（昭和2年）頃のものとして推測し、その旨解説を付した。

雨量分布図・林野分布図・開拓農民入植図・満洲帝国統治組織表などもパネル展示をした。直接画鋏で止めるわけにはいかないので、窮余の策として、立て看板の両よけに使う巨大なビニールでラッピングをした上でパネルに貼り付けた。見学者が多少手で触れても大丈夫で名案だったと思う（写真1のように、机上展示に沿ってパネルを配置した。）。

特筆すべきは、大きさ240×220cmの「満洲・朝鮮・北支鐵道圖」（1938）という巨大な鉄道地図の発見だった。この地図と「東亜大陸諸国疆域圖」（1937）というアジアの全体図については、67～8年も前の掛地図とは思えないほど保存状態もよかつ



写真6 掛地図の展示

たのだが、大きすぎて図書館の閲覧室にどう展示してよいか途方に暮れた。しかし、「満洲グラフ」と並んで今回の展示の目玉と言ってよいものである。展示会用の予算はゼロだったが、結局上司に頼みこんで、ピクチャー・レールの工事をしてもらうことにした。おまけに照明もつけてもらい、思っていたよりも立派な展示をすることができた(写真6)。アンケートには現れなかったが、一番目につきやすかったせいもあって足を止める人が多かった。年配のカップルの方がこの地図を指差しながら何やら懐かしそうにお話をしている姿を見たら、発見から展示までいろいろ苦勞した甲斐があったと思った。

④ 関連年表の作成

個別の資料についての詳細な解説はしなかったかわりに、関連年表は欠かせないと判断し作成した。「世界大百科事典」や入門書として選んだ「図説満洲帝国」(河出書房新社、1996)の年表を基本にして、「満洲グラフ」に関連する事項などをプラスした。前述の「柳条湖」など表記には注意した。

8. 広報(PR)について

図書館員にとってあまり慣れていないとは言えないのが広報の問題である。ホームページへの掲載やポスター作成くらいなら何とかできるが、マスコミへのPR依頼に関しては、図書館だけで動いてもなかなかうまくいかないようだ。やはり大学事務局の広報担当と連携協力して事にあたった方が効果的だ。特に法人化後、学外へのPRについては、ノウハウやルートを持っているので、もっと最初から相談すべきだったと反省している。

以下は、主なPR活動の内容である。

①ポスター

インパクトのある写真ということで「満洲グラフ」

8号(1934)に掲載されていた「満鉄超特急あじあ号」の写真をバックに、今回のキャッチフレーズ「戦後60年、資料で見る「満洲」」を配したポスターを自前で作製した。館内や学内関連部局に掲示し、学外については、県内の全ての公共図書館や近隣の大学図書館、判る範囲で全国の「満洲」関連の研究をしている大学部局や研究者に配布した。

②立て看板

意外と効果的だったのが、大学正門前と図書館玄関前の2ヶ所に設置した立て看板である。少なくとも「何かイベントをやるのだな」とそこを通る人は見てくれる。本学のキャンパスは緑豊かな散歩コースを設定して近隣の市民に開放しているので多くの学外者の目にも止まったようだ。

③ホームページとEメール

ホームページについては、イベント開始のほぼ1ヶ月前に展示会・講演会の案内、旧植民地関係資料室所蔵「満洲」関係資料目録、ポスター、展示資料一覧等を一齐にアップした。(URLは下記のとおり)

<http://www.lib.utsunomiya-u.ac.jp/manshu.htm>

学内の全教職員には案内のメールを発信した。

④マスコミ

最初のうちはどうしてよいかわからず、とりあえず各新聞の地方版やミニコミ誌宛に情報を流したが、題材が地味だったせいか一部を除いてそれほど採りあげてはもらえなかった。学内の広報のルートを通じて県の記者クラブにPRを依頼したら、早速「栃木テレビ」が取材に来てくれた。ただ放送されたのが会期の半ば過ぎだったのが残念だった。ここでは、栃木県の韓国・満洲への観光記録(前出図1)やリットン報告書等が展示されていることが紹介された。

毎日新聞には「戦後60年の原点」というシリーズがあるが、栃木の地方版でも、そのシリーズの中で「満洲」から引き揚げてきた人たちが、戦後今度は那須原野の開拓地に入植した話(5回連載の企画)や栃木県農業大学校から勤労奉仕隊員として「満洲」に渡った話が記事になった。それを担当した記者が当館の展示会に興味を示し、2時間近くの取材の上、同シリーズの記事にしてくれた。「貴重なグラフなど展示」と題した写真つきの5段組の大きな扱いで、資料室の開設から展示資料の内容までかなり詳しく紹介してくれた。最後には筆者の言葉として「貴重な資料の発見と同時に、図書館の新たな役割や可能性を見いだすことができた」と結んであった。そんな立派なせりふを言った覚えがなかったのだが、ほぼこちらの趣旨を伝えてもらったのには間違いはなく、取材と記事との関係がよくわかって良い経験に

なった。掲載日は講演会の当日であった。

9. 講演会の開催

講演会は平成17年11月23日。学祭の期間中とはいえ、テーマが地味なだけに参加者はそれほど多くはないだろう（20～30名か）と踏んでいたのが、当日受付で充分と判断した。参加者がごく少数だった場合を想定して、講演を聴講するための図書館員も多く休日出勤を予定していたくらいだった。しかし、20日から始まった展示会は予想外に出足がよく、来場者の話やアンケートなどから、テーマが地味だったのではなく、テーマが思ったより特定された個人に依存するものだということがわかってきた。つまり「満洲」と聞いても何の感慨も抱かない一般の学生たちにはほとんど関心がなく、逆に年配の方や中国からの留学生など、「満洲」に関わりを持った人はそれぞれが独自の深い関心を持って来場していた。そうなるとうち参加者数の予想が全くつかなくなってしまう、会場の設定や準備する資料の数に困ってしまった。とりあえず今度は参加者が多かった場合を想定して、会場として予定していた会議室の机を片づけ、いつでも閲覧室の椅子を補充できる態勢を整えた。レジュメ等の資料も多めに準備した。

その結果、聴講した人51名、うち学外者は20名だった。当初予想の倍近くになり、椅子の補充を何度かして、ほぼ部屋のスペース満杯の盛況だった（写真7）。

最初に館長の挨拶があり、続いて筆者が資料室開設のいきさつを説明し、図書館ホームページに公開した所蔵目録や展示資料の説明を行なった。その後、準備作業の中で興味を覚えた人物「甘粕正彦」を紹介した。彼は憲兵大尉として大杉栄と伊藤野枝を殺害し投獄され、なぜかその数年後に「満洲映画協会」の理事長として歴史の表舞台に登場するという人物である。前述の村上もとか「龍（RON）」に登場したコミックスの彼と佐藤忠男の映画論「キネマと砲聲」²¹⁾の中に発見した本人の写真と映画「ラスト・エンペラー」²²⁾で坂本龍一が演じていた彼を比較してスクリーン表示した。

伊藤教授の講演は、「満洲」の呼称問題から日本人の「満洲」認識、最近の「満洲（国）」をめぐる論議まで、その歴史をたどりながらの解説で一般の方にもわかりやすい内容だった。筆者にとっても、にわか勉強によるつまみ食いのような知識が一本の糸で繋がるようでたいへん参考になった。

10. アンケートと評価について

アンケート用紙は展示会場に置いたが、なかなか



写真7 講演会の様子

書いてもらえなかった。自分のことを振り返ってみても、「こういうものはよほどのことがない限り書かないなあ」というのが正直なところである。しかし、書いてくれた人はそれなりの感慨・意見を持った上でのことと思われ、数は少なくとも中身の濃いものと都合よく解釈した。

回収数は48で、うち学内者19、学外者28、不明1だった。年齢は60歳代以上が23で半数近かった。最高齢は84歳だったのにはびっくりした。この方は「満洲国」政府の一員として在籍していたそうで、「戦後もたびたび中国を訪問して微力ながら日中友好に努めている」と記している。このように高齢者の方は「満洲」体験者がほとんどと思われる。

前述の学生からの意見以外は概ね好意的な意見が多かった。

主な意見を大別すると以下のとおり。

- ① 展示会について
 - ・貴重な資料だ。
 - ・宇大にこんな資料があることを知らなかった。
 - ・手にとって見るのができたのはよかった。
 - ・資料収集や展示の苦勞に感謝する。
 - ・もっと若い世代に見て欲しい。
 - ・こういう企画をもっとやって欲しい。
 - ・説明がもっと欲しかった。
 - ・現在との対比がもっとあればよかった。
- ② その内容について
 - ・「満洲」にいた者として感慨深い。懐かしい。
 - ・日本が中国に何をしたのか反省させられる。
 - ・知らなかったのが勉強になった。
 - ・「満洲」の真相がわかった。

図書館の閲覧室で展示をしていたので、いったいどれだけの人が見てくれたのかは不明である。入館ゲートがあるので、展示会のために来館した旨申告をしてくれた人については統計をとった。学祭期間

中の4日間で233名、その後の土日を中心に35名ほどである。おそらくその何倍かの人がカードで入館して見てくれたと思われる。しかし、やはり評価のためには統計が必要なので、閲覧室での展示の統計の取り方については今後の課題である。会場に常時受付を置くほど人員に余裕がないので、何か良い方法があればご教示頂ければ幸いである。

11. むすび

大学図書館の地域貢献の環としての今回のような試みは、全国的に見れば最近では特にめずらしいことではないが、当館にとっては初めての経験である。また中期計画に基づく実践には常に評価も要求されている。ともかくもそのための記録を残すことが必要であると思い本稿を作成した。

「文教ニュース」等では、各大学図書館の展示会・講演会の事例が数多く記事になっている。その割には具体的な実践の記録が報告されている例はほとんどないような気がする。「大学図書館研究」の総索引(1-70号)を見ても、企画展示会に関する報告は数件しか見当たらなかった。これからこのような企画に携る方に少しでも参考になれば幸いである。

余談になるが、資料室所蔵目録の作成中に、入力データの点検のため、全データを請求記号順にソートしたところ、最後の行にリストアップされたのが、井出孫六の「終わりなき旅」(岩波書店、1986)であった。偶然にしては出来すぎた書名だったので、念のため現物を確認し、表紙を開くと、そこには寄贈者として、平成元年版目録作成者の名前が記されていた。単なる偶然か、それとも今日を見越した彼のいたずらか、この小さな奇蹟に、今は亡きその図書館員の仕事に対する思いに少なからず感銘を受けた。このことを記してむすびとしたい。

注記・参考文献

- 1) 国立大学法人宇都宮大学、中期目標・中期計画・平成17年度計画、宇都宮大学、2005、35p.
- 2) 宇都宮大学附属図書館、宇都宮大学附属図書館所蔵満州関係資料目録、宇都宮大学附属図書館、1989、54p.
- 3) 北海道大学附属図書館、北海道大学附属図書館所蔵旧外地関係資料目録-朝鮮・台湾・満州(東北)-、北海道大学附属図書館、1975、514p.
- 4) 広辞苑(第5版)、岩波書店、1998、p.2536
- 5) 井上真琴、図書館に訊け!(ちくま新書486)、筑摩書房、2004、p.131

- 6) 世界大百科事典:第27巻、平凡社、1988、p. 253 (なお興味ある方は「百科事典はまず索引巻から検索し」⁵⁾「満州国」や「満州事変」など、他の項目の詳しい記述も参照されたし)
- 7) 武田徹、偽満州国論(中公文庫)、中央公論社、2005、293p.(この著作は、「満洲」に関する基礎知識を得る上で非常に参考になった。「満州国」と「ひょっこりひょうたん島」の比較など興味深い内容に富んでいるので一読を薦めたい。)
- 8) 「中国東北関係資料室」では日本では馴染みがなく、「旧満州」とか「外地」という言葉も諸般の事情で相応しくない。結局、伊藤教授も推薦したこともあり、朝鮮・台湾総督府関係の資料の整備も視野に入れた「旧植民地関係資料室」とすることで落ち着いた。なお「満洲」は法的には植民地ではないが、実質的には植民地であったという見解を採った。
- 9) 以前は柳条「溝」事件と称し、このニュース写真にも柳条溝鉄道爆破と見出しが付いているが、現在は柳条「湖」が正しいとされている。
- 10) 宇都宮大学農学部六十年史、教育文化出版、1985、p.154-156
- 11) 清岡卓行、アカシヤの大連(講談社学芸文庫)、講談社、1988、388p.
- 12) 前掲11)の裏表紙に書かれた宣伝コピー
- 13) その際、秋子の詩が掲載されたページや「満洲グラフ」の表紙のコピーを清岡氏にお送りしたところ、折り返し丁寧な礼状を頂いた。その半年後の平成18年6月、氏は83歳で逝去された。ご冥福をお祈りする。
- 14) 満洲グラフ=Manchuria pictorial、南満洲鐵道株式会社總務部庶務課、1933-1944(?)
当館所蔵:創刊号(1933)-21号(1936)、23-26号(1936)、29-65号(1939)、71-73号(1940)
- 15) 淵上白陽と満洲写真作家協会(日本の写真家;第6巻)、岩波書店、1998、71p.
- 16) 名古屋市美術館、特別企画展「異郷のモダニズム~淵上白陽と満洲写真作家協会」展示会図録、1994、1冊(頁付けなし);会期:1994.6.18~7.17
- 17) 前掲16)
本稿の淵上白陽と満洲写真作家協会に関する記述は、参考文献(15)の解説、飯沢耕太郎「写真芸術の理想郷-淵上白陽と満洲の写真家たち」と参考文献(16)の学芸員竹葉丈による解説や関連年表を主に参考にした。また、「満洲グラフ」の展示用の解説を作成する際の参考にもした。
- 18) 展示については特に法的な制約はないように思うが、やはり事前連絡は必要と判断して、小学館の

- 同コミック誌の編集部に、問題ある場合は連絡してくれるよう通知した。(その結果回答なし)
- 19) 前掲10)
- 20) 昭和国勢総覧(上巻). 東洋経済新報社, 1980, p.54-55 (戦前の主要在留地別在外邦人ほかの統計による)
- 21) 佐藤忠男. キネマと砲聲: 日中映画前史 (岩波現

- 代文庫. 社会91). 岩波書店, 2004, p.105
- 22) ベルナルド・ベルトルッチ監督. ラスト・エンペラー. 1987年イギリス・イタリア・中国合作映画 (松竹富士提供)

<2006.1.6 受理 いたばし ひさお 宇都宮大学附属図書館利用者サービス係長>

ITABASHI, Hisao

Books and Periodicals Collection on “Manchuria” at Utsunomiya University Library

Abstract: Utsunomiya University Library had a collection of materials on Manchuria, collected by the university's predecessor the Utsunomiya Agricultural College, and decided to reutilize the materials by constructing a specialized reading room called the “Reading Room on the Former Colonies” to house the materials and make them publicly available. At the same time, the collection catalog was made available over the Internet on the Library's homepage. The Library also planned a related exhibition and public lecture to commemorate the event. This paper reports on these events as an example of regional contributions made by academic libraries.

Keywords: Utsunomiya University Library / Exhibits / Public Lectures / Open Door Policy / Regional Contributions / Manchuria / Former Colonies